

コロナ禍における短期大学での国内研修の成果について Results of Junior College Student's School Trip during the Pandemic COVID-19.

国際学院埼玉短期大学教育研究所 大野琴絵
国際学院埼玉短期大学健康栄養学科 馬場和久
国際学院埼玉短期大学健康栄養学科 大雅世

令和2年1月に国内で最初の感染者が確認された新型コロナウイルスは、わずか数ヶ月で世界的なパンデミックを起こし、各国に甚大な影響を及ぼしてきた。国内においては、感染者の確認から3年が経過する現在も未だに収束の気配が見えず、様々な制限の中での生活が続いている。

このような中、本学が毎年実施してきたカナダやオーストラリア、台湾方面への海外研修は、令和2年度、令和3年度と中止を余儀なくされたが、令和4年度についてはこれまでの研修のねらいを生かし、国内での研修として実施することとした。

ここでは、コロナ禍での実践例として既に紹介した国内研修としての成果を報告するものである。

キーワード：海外研修、国内研修、コロナ禍、学修成果、SDGs

1. はじめに

本学では、1年次に教養科目としての「日本文化と国際理解」を必修として教育課程に位置づけており、日本の伝統文化や海外文化の学修を通して異文化理解を深め、職業人として、広く国際社会に貢献できる資質を身に付けられるよう講義や演習を通して学んできている。また、ここでの学修成果が2年次での履修科目「海外研修」に生かせるよう内容の工夫を図っている。特に、卒業生が体験してきた、本学の教育提携校であるオーストラリアのシドニー大学・マッコーリー大学、カナダのバンクーバーアイランド大学での交流の様子や台湾での体験を紹介するなどして、実際の海外での研修に興味や関心を持たせ、2年次での海外研修の準備を進めている。

しかし、新型コロナウイルスの世界的蔓延の影響で、令和2年度は渡航を前にして中止となり、令和3年度は海外研修の科目は開講したものの、現地での研修を計画するには至らなかった。そこで、令和4年度は、海外研修を国内研修として実施し、科目としてのこれまでのねらいを少しでも達成できるよう、学生の主体的で協働的な学びに重点を置きながらシラバスの内容を変更して取り組んできた。特に、研修先とした横浜では、自ら研修コースや学修課題、行動目標等を設定し、海外や日本の文化、他者とのコミュニケーションや表現力、国際人としての礼儀やマナー等を体験的に学びながら、その成果が得られるよう計画した。

また、本学が平成31年12月に国連グローバル・コンパクト（UNGC）に署名したことから全学をあげて取り組んでいるSDGsに関する学修も講義等の中に意図的に位置づけ、成果を積み上げているところである。

2. 令和4年度「海外研修」当該授業の成果

2-1 授業の記録

(1) 現地研修のまとめ

現地研修終了後の授業では各班協働し、パワーポイントでの報告書を仕上げた。作成したスライドには、行動目標、研修先、行程、研修内容の報告、行動目標の達成状況等についてまとめ、全体としての研修成果を必ず入れるよう指導した。また、スライドは写真やイラスト等を使用し、文字のフォントやサイズについても見やすく作成するように指導した。更に、学生は皆、横浜中華街で昼食を摂ったことから、食事内容や価格、味や発見したことを記すように伝えた。全体のまとめ方として「行かなくてもわかる情報」を記すのではなく、経験して初めてわかった内容を記載するよう、また、「海外研修」の授業という視点から、海外や日本の文化についても記すように、併せて指導した。資料1は作成したスライドの一例である。



資料1 現地研修のまとめ (一部抜粋)

(2) 現地研修の発表

発表は101教室にて、パワーポイントを使用し、質疑応答を含めて各班15分程度での発表とした。学長、副学長、両学科長、指導教員が発表に同席し、最後に学長から講評があった。



図1 発表の様子

各班の行動目標に対する自己評価の結果は、表1のようであった。また、まとめと感想は、表2のようであった。

表1 行動目標は達成できたか

| | |
|----|--|
| 1班 | <ul style="list-style-type: none"> ・協調性をもってお互いに注意し合って行動する <p>学科を超えた班だったが、最後まで協力し合い、連絡を密に取り合って研修することが出来た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告・連絡・相談・確認を実行することができる <p>昼食時話に夢中になってしまい、2回目の点呼時間に遅れてしまった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班員の意思疎通が確実にできる <p>当日は暑い中の研修だったが、参加できたメンバーは、皆で声かけあって、体調不良にもならず、行動することができた。</p> |
| 2班 | <ul style="list-style-type: none"> ・時間を守り、速やかに集合することができる <p>二回目の点呼で、中華街の中の「山下町公園」に行かなければならないところ、「山下公園」に行ってしまいました。そのため、点呼時間には間に合いましたが、当初計画していた行程の時間に少し遅れてしまいました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礼を尽くすことができるようにする ・報告・連絡・相談・確認を確実に実行することができるようにする <p>常に礼を尽くすことを忘れず、班員全員が、先生方や班員と報・連・相・確をし、熱中症にもならず、ハプニングを防ぐことができた。</p> |
| 3班 | <ul style="list-style-type: none"> ・礼をつくすことができる。 <p>ご飯を食べて店から出る時に「ごちそうさまでした。」「ありがとうございました。」等の感謝の意を伝えることや、飲食時のマナーも徹底できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告、連絡、相談、確認ができる。 <p>時間通りにチェックポイントに到着し、先生の確認をもらえた。 体調管理の報告もすぐにできた。 班員とも声掛けを行い、チームワークを大切にできた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康管理ができる。 <p>一人一人が体調に気をつけて、水分補給等の熱中症対策ができた。</p> |

表2 各班のまとめ・感想

| | |
|-----------|---|
| <p>1班</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・班員同士が違う学科ではあったが、助け合って行動でき、仲間と協力して行動することの大切さを知ることができた。また、コミュニケーションスキルも上がったと感じた。 ・点呼時の遅刻等、反省点もあったが、改めて集団行動時の事前確認や連絡、10分前行動の大切さを学んだ。 ・埼玉県から程近くにあるが、研修に行く前は横浜の歴史についてよく知らなかった。研修を通して博物館や資料館などたくさんの名所を見学し、感動した。横浜には今まで知らなかった海外との様々な歴史があることを学ぶことができた。 ・なによりも、新型コロナウイルスの影響で、様々な行事が縮小されていた中、今回の研修で沢山の楽しい思い出をつくることが出来た。 ・集団行動を通して、国際学院埼玉短期大学の建学の精神「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」が詰まった研修旅行となった。 ・機会があったら、再度横浜を訪れ、学びを深めていきたいと思った。 ・今回の研修で学んだことを、今後も忘れずに行動していきたい。 |
| <p>2班</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・横浜には、横浜港があるためそこから様々な異文化交流を経て、現在のように栄えてきたことがわかった。今回班別行動で選択した山手234番館では関東大震災後の洋風建築を氷川丸では時には貨客船、時には海軍の特設病院船と2つの役割を果たした当時最新鋭の技術を、船内を見学すると共に船の歴史に触れることができた。 ・また、途中でハプニングがあったが、班の中での連携やすぐに連絡・報告することで、トラブルを回避でき、報連相やチームワークの大切さを学べた。 ・研修先を選んだ理由として、「集団行動を通し自己管理能力を養い、すべての基本となる人間性を高めるため」と理由を挙げていたが、今回の研修で、熱中症対策等の自己管理能力や、様々な土地を訪れ歴史を学び、経験をしたことにより、教養を養うことが出来、人間性が高まったのではないかと思う。 ・今回の研修で学んだことを今後も活かしていきたい。 |
| <p>3班</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・今回の研修では、A組とB組の混合班のためそれまで全く話したこともなかった人もいる中での研修だった。事前打ち合わせ等でもあまり話す機会がなく当日が不安に感じることもあったが、クラスを超え、研修を通して仲が深まり、チームワークを大切にすることが出来た。 ・1回目の授業で、学長先生の講話の際に委員長からの謝辞の中で、「どの人とも仲良く、コミュニケーションをとって、充実した研修にしたい」と宣言したことを守ることができた。声を掛け合いながらトラブルもなく研修を終えることができたのでよかった。 ・行動計画を立てる際に、ゆとりをもった行動計画にしたことで、当日は炎天下で熱中症も心配されていたが、こまめに休憩を取り、体調管理に努めることができたのでよかった。 ・それまであまり触れることのなかったものを体験する等、触れることで貴重な経験をすることができ、視野を広げるきっかけとなった。 ・海外と日本は、どの時代も切っても切り離せない関係であり、今の日本があるのも海外からの文化を取り入れたり、交流したりを繰り返して存在しているということが今回の研修 |

で改めて学んだ。国によつての文化の違いにも触れることが出来た。

- ・今回の研修を通して仲間と協力することの大切さや、スケジュール管理の大切さ、それを実行することの段取りや行動力、異国の文化の知識やそれらを通して視野を広げ、相手を理解することの大切さを学んだ。特に、「自分だけではない」ということを意識し行動すること、経験が知識となり、知識が思い遣りにつながること、これらは専門職人となるうえで、非常に大切な心構えだと感じ、これからの生活の中や社会でも今回の研修で学んだことを活かしていきたいと思った。

今回の研修では、沢山のことを学べ、とても実りのある研修となった。

班ごとに現地研修の記録をまとめた冊子を作成し、発表資料とした。
資料 2 は各班で作成した冊子の表紙である。



資料 2 班ごとの記録冊子の表紙

学長からの講評

- ・立派な発表を嬉しく思う。報告書にも気持ちが込められていてよくまとめられている。努力を認めたい。また、学科やクラスを越えた班編成もよかった。不安の中での現地研修であったと思うが、成し遂げたことを、今後の様々な場面での糧とし、自信に繋げてほしい。
- ・プレゼンの内容は立派であったが、多くの人が原稿に目が行き、目線が下になってしまっていたため、せっかくの内容が十分に伝えきれなかった。しかし、質問があった際の回答や委員長の発表ではしっかりと自分の言葉で前を向いて話ができおり、とても素晴らしかった。
- ・是非これからもこのような姿勢を大切にしているいろいろなところで挑戦いってほしい。気持ちを伝えるには、その経験が必要である。このような経験を積み上げてほしい。
- ・「冷暖自知」の言葉のとおり、麻婆豆腐が辛かったり、プチトマトが爆発して服が汚れたりすることはあるが何事も自分で経験しなければわからない。面倒とか、大変そうとかで、尻込みをしてせっかくのチャンスをなくしてしまっていることがこれまでなかっただろうか。今回のように一歩前に踏み出して、いろいろと経験することで、内面はより豊かになっていく。これからも頑張ってもらいたい。

- ・当日は大変暑い中での研修であったが、初期の目的達成はもちろん、熱中症等に罹ることもなく、それぞれに自覚をしながら、一生懸命に取り組んできたことは素晴らしい。
- ・委員長の言葉にもあったが、皆様々な不安があったと思う。「不安のない人生はない」と「敦照の心」にもあり、「不安になった時は誠実に行動すればいい」と教えている。今後、社会に出て初めてのことに遭遇すると不安になることもある。そんな時こそ、誠実に、できることを1つ1つしっかりとやっていく。そうすることで道は必ず開ける。是非今回の研修で培った貴重な経験を糧に、これからも頑張っていってほしい。

(3)卒業生による講話（オンライン）

現在、キルギス共和国で、青年海外協力隊の料理隊員として働いている本学の卒業生から、海外事情や生活の様子等についての講話が行われた。

①講師プロフィール

- ・里見 遥 講師
- ・平成 29 年度(2017 年度) 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科調理製菓専攻卒業
- ・卒業後、海上自衛隊の調理係として3年間勤務
- ・退職後、新型コロナウイルスの影響で青年海外協力隊の入所が延期となり、1年半後青年海外協力隊の料理隊員としてキルギス共和国へ入国
- ・現在、キルギス共和国に入国してから4か月間を過ごしており、現地の職業訓練校で日本料理を教え、学生の料理審査を行っている。

②講話内容

キルギス共和国の現地から ZOOM を使用し、時差マイナス 3 時間の現地時間 7:00、日本時間の 10:00 から開始し、約 25 分の講話が行われた。内容は「本人プロフィール、なぜ青年海外協力隊青年隊に参加したと思ったのか、青年海外協力隊の紹介、キルギス共和国の紹介（言語、日本との距離・魅力・気候・景色・食文化・親日・スーパーマーケット・宗教等）、現地での苦労や乗り越え方、現在の活動内容、国際学院埼玉短期大学の学生へメッセージ」等であった。

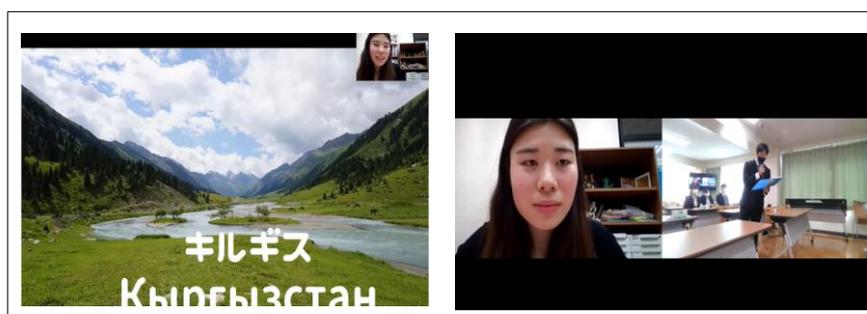


図 2 卒業生講話の様子（オンライン）

里見氏の講話の中で、自身が本学での海外研修や国際交流、また、青年海外協力隊としてキルギスでの活動の中で培ってきたことの想いや経験談を取り入れながら話があった。「語学以外にもコミュニケーションは沢山ある」「コミュニケーションで大切なのは、目の前にいる人と仲良

くなりたい、あなたと話したい、あなたにとっても興味があるのだよと思うことが1番大切」「人を知って文化を知ることが1番大切にしている」「今日の前にある自分が出来ることを少しずつ進めながら、スモールステップで頑張っていきたい」「できないことに焦点を当てるのではなく、出来たことに対して目を向けて、沢山自分を褒めてあげることが大切」などが述べられた。これは、これから社会に出て様々な人たちと関わることになる学生にとって非常に有効な講話であった。

③代表学生の謝辞

講話終了後、学生代表として現地研修委員長から里見講師へ謝辞を述べた。委員長から里見講師への謝辞の要約は以下のとおりである。

- ・キルギス共和国の地理や宗教について、人たちがとても日本人と親しくしてくれること、青年海外協力隊の活動として、コミュニケーションをとることは言語だけではないということ、一緒に料理を作ったり、日本の歌を歌ったり、目の前の人と、あなたと仲良くなりたいのだよという気持ちが大事であることがわかった。
- ・社会にでて、様々な人たちと交流していくが、そういう気持ちを常に持って会社の方々達と関わりが持てたらいいなと思った。
- ・貴重な講話をありがとうございました。

④学生の感想

表3は卒業生講話を受講した学生の感想を一部抜粋したものである。

表3 学生の感想

| |
|---|
| <p>現地の子どもたちが日本の歌を歌っているのを見て、親日感情が伝わってきて、嬉しくなりました。「できないことに焦点を当てるのではなく、できたことに目を向けて褒めるのが大事」という言葉がすごく心に刺さりました。クルダックとマントゥが美味しそうだったのでどこかで食べられたらいいなと思いました。これからも日本料理をキルギスでたくさん広めて欲しいと思います。</p> |
| <p>中でも印象に残ったのは、調理実習で「何を作っているの？」と子どもたちに質問をするというお話です。動画では言語の壁がある中で積極的にコミュニケーションをとる先生の姿や子どもたちが会話を楽しみながら調理をしている姿を拝見することができ、心に響きました。またできないことに焦点を当てるのではなく、できた自分を褒めてあげるといってお話も印象に残りました。私はこれから保育園実習が控えているので、できないことを責めずに小さなことでも褒めてあげながら明るく乗り越えていきたいと思いました。</p> |
| <p>先輩のお話の中で特に伝わってきたのは、目の前にいる人と仲良くなりたい、あなたと話したい、あなたに興味があると思うこと、それを伝えることが大切だということです。保育を勉強している私自身、言葉がまだ分からない子どもを相手にする時にノンバーバルコミュニケーションの重要性を感じたことがあり、先輩のお話に共感しました。また、「できたことに目を向けて、自分を褒めてあげることが大事」という言葉には、とても勇気づけられました。キルギス共和国に行ってみたいと思いました。</p> |
| <p>「青年海外協力隊」という活動がある事を初めて知りました。栄養士だけでなく、人それぞれ</p> |

が得意とする事を多くの人に広げていく活動がある事はとてもよい事だと興味を持ちました。人の思いを相手に必死に伝えようとする事の大切さを学ぶことが出来ました。これからの就職活動に今回お話頂いたことを活かせるようにしていきます。

本学を卒業して海上自衛隊で調理等の経験しながらキルギス共和国に行き日本料理を指導しているのはすごいと思いました。言語は英語ではなく、ロシア語とキルギス語であるのにも関わらず、1から勉強し、Google翻訳を使ったり、キルギス共和国の日本語が話せる方に教えてもらったり、コミュニケーションを大切にされているのがとても素敵だと思いました。

私はコミュニケーションを取るのが得意な方ですが、日本以外の人と上手く話せる自信は無いし、勇気が出ないなと思ったので、里見さんの話を聞いて立派な方だなと思いました。

キルギス共和国の人はお客様を家に招いてのおもてなしが豪華で、料理も沢山用意されているとのこと。私もキルギス料理など食べてみたいと思いました。

コミュニケーションは言語だけではなく現地の人と一緒に料理を作ったり、子供たちと一緒に日本の歌を歌ったり、写真を撮ったりする中で育むもの。要は目の前の人と仲良くなりたい、話したいなどの気持ちや行為が大切だと話されていました。

これから先、自分も社会に出て色々な人と関わることになりますが、言語だけではなくコミュニケーションを大切にしながら生活していきたいなと思いました。

キルギス共和国の話聞くまでは、あまりよい教育を受けることが出来ていないのではないかと思いましたが、話を聞いてきちんとした教育が受けられているのがわかりました。また、と里見さんが行っているキルギスの学校で調理実習をしているとのことなので、自分も調理を学んでいる一人として海外でも通じるよう、調理技術を高められるように頑張ります。

(幼児保育学科がピンク、健康栄養学科食物栄養専攻が水色、健康栄養学科調理製菓専攻が黄色)

3. 令和4年度授業結果の分析

(1)対象及び時期

令和4年度国際学院埼玉短期大学幼児保育学科・健康栄養学科の2年生のうち、科目「海外研修」の履修生16名を対象とした授業の記録とアンケート調査をもとにしての授業結果のまとめと分析を行った。対象とした授業は、2022年4月～7月に実施した。

(2)分析資料

毎時間の授業内容の記録と全8回の授業の中で実施してきた「振り返りシート」のまとめ、授業の成果物としての学生のノートの記録内容状況、及び全8回授業後の「授業アンケート」集計の結果から調査を進めた。

(3)ノート提出結果の分析

本授業の評価は、「課題への取組内容やノートのまとめの状況(70%)」、「態度・姿勢(現地研修や聴講時の姿勢、学びに向かう力)(30%)」として、合計で60%以上を合格とした。特にノートへの記録については1回の講義に対して2頁以上は記入し、単に講義内容等を列記するだけでなく、授業から学んだことや学んだことを今後の生活にどのように活かしていくかなど、自分自身の考えにも触れて記録するよう指導した。

履修者全員が期限日までにノートの提出を終えることができ、出席日数について問題となった者もなく、全員が科目履修の単位を修得することができた。

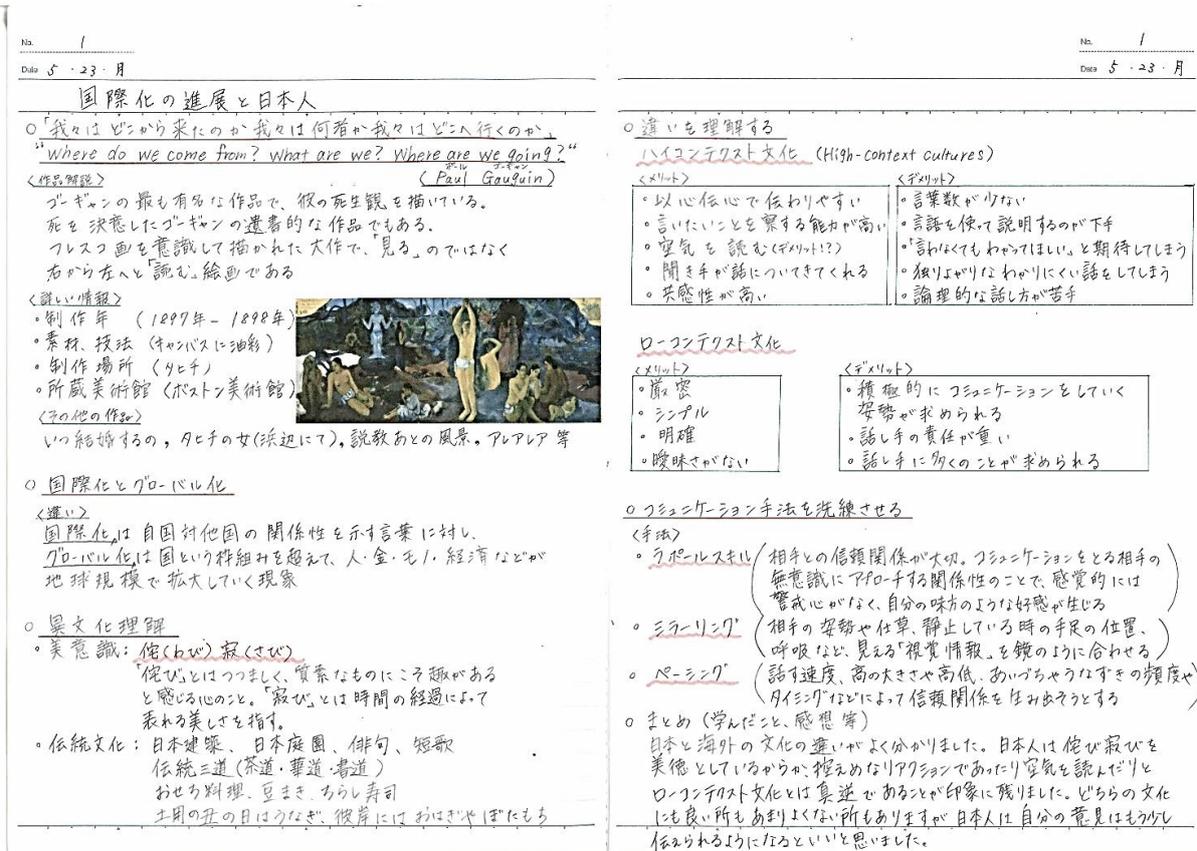


図3 ノートの記録例

授業中や活動中のメモを活かしながら、授業後に時間をかけてノートをまとめ、さらに自身の考え方や感想などを記録していた学生も多くいた。(図3参照)

感想等の記述例・・・第2回「多文化と共生社会」から

日本では当たり前のようにきれいな水が使える、食べ物に困ることもなく、しかもきれいな環境で生活できていることがどれほど幸せなことかを改めて感じる事ができた。

インドでの一部の人の暮らしを紹介していただいたが、十分な飲食が叶わず、大変そうだな、辛いだろうなと受け止めていたが、そんな中でも人々は前向きに、また幸せも感じながら生活しているというお話も伺い、自分の生活を基準にして物事を判断することは間違っているのが分かった。さらに、生活が困窮している人々の支援については、「現地の人々が何を必要としているのか」ということを考えなければならないことにも気付かされた。

一方、記述内容が講義や活動の項目だけで終わっていたり、十分な考察や感想が記されていないかたたりした学生も一部に見られ、それらの課題についてはノート返却時に個別に指導をした。ノートには、担任から赤字で評価コメントを書き入れるなどした。

(4) 授業アンケート結果からの分析

8回の授業終了後、受講学生が回答した「授業アンケート」結果とその分析について以下に示す。

質問1. 授業はシラバスの内容に沿って行われましたか。

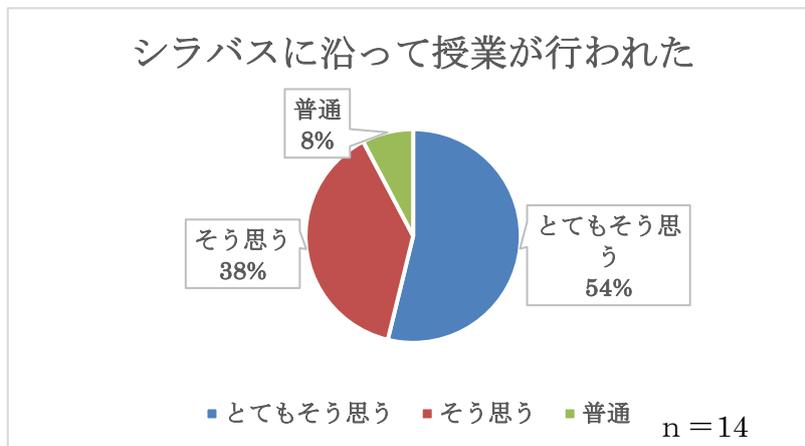


図4 シラバスに沿った授業が行われたか

年度当初、本学全学生に配布している全科目の内容を掲載した「シラバス」の冊子には、科目「海外研修」として、カナダやオーストラリア、台湾での現地研修を前提にした15回の授業内容を示している。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、海外への渡航が困難であることから、令和4年度の本科目についてはシラバスの内容を変更し、8回の授業、現地研修先は国内とすることについて前年度より情報提供を行ってきた。そして、第1回の授業において変更後のシラバスを配布し、履修者に対し改めて授業概要の説明を行った。

図4の結果を見るとほとんどの学生がその内容を理解していることが分かる。但し、8回目の授業に取り入れた、キルギス共和国に滞在している本学卒業生とのオンラインによる交流授業はシラバス上に示されておらず、シラバスの説明時に口頭で伝えたことから十分に周知されていたとは言い難い。

質問2. 授業での説明はわかりやすかったですか。

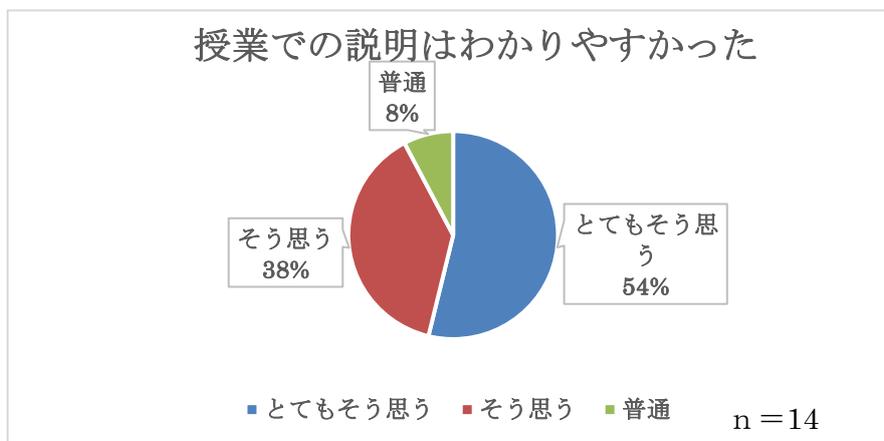


図5 授業での説明はわかりやすかったか

本授業は2年生担任の全教員をはじめ、学長や外部講師等、多くの指導者が関わってきたことから、授業毎に進行や指導者が替わってきたとも言える。また、現地での研修も含め、多様な授業スタイルを取り入れてきており、一部学生にとっては授業形態に慣れないまま進められたという印象があったかもしれない。しかし、アンケート結果を見る限りでは多くの学生が指導内容を理解し、受け入れてきたことがわかる。

質問3. 授業に対する教員の熱意を感じましたか。

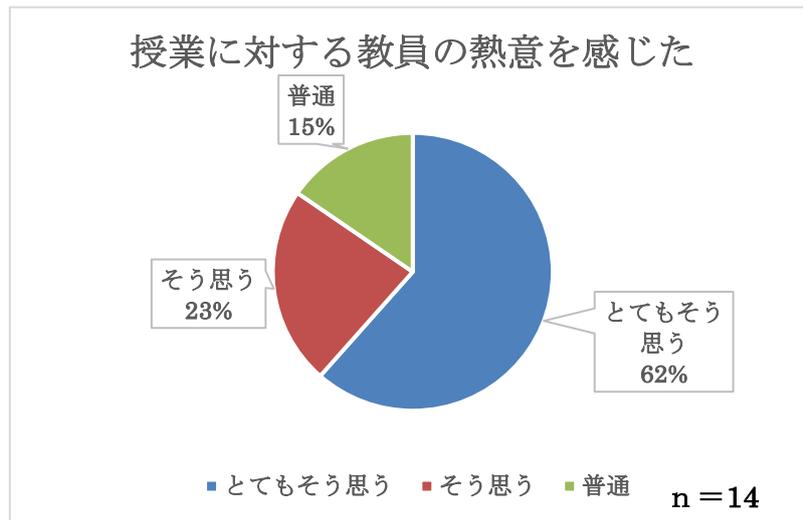


図6 授業に対する教員の熱意を感じたか

授業者の姿勢や熱意に対する学生の評価であるが、全体としては概ね良好であったと言える。8回の授業では講義や現地での研修に関わって、事務的な連絡や伝達も多く、また、学生主体の授業形態を核に据えたことから、調べ学習やそのまとめ、協議、発表等に時間を費やしたことによって、直接的な教員の関わりが薄く感じられたかもしれない。

質問4. 授業では質問や課題に対するフィードバックがありましたか。

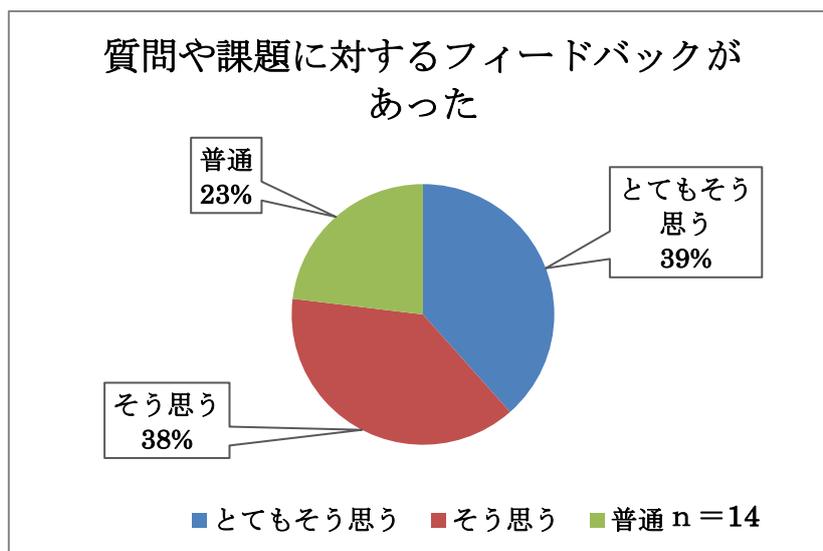


図7 授業では質問や課題に対するフィードバックがあったか

毎回の授業では、「振り返りシート」を活用し、学生はその時間に特に学んだことや感想等を記入した用紙を担当に提出させてきた。担任は、評価コメントを記入し、次時に返却している。

外部講師の授業では、謝辞も含め、学習内容に対する質問や感想を代表学生に発表してもらい、そのフィードバックもその場で頂いている。また、一人一人の学生の授業に対する思いや感想等を記入した用紙をまとめて指導者に送信してきたが、指導者にはその返信まで求めていなかったことから、学生にとっては十分なフィードバックとして捉えていないことも考えられる。

さらに、本授業では、各自がまとめた記録ノートを授業の最終日後に提出させ、評定の資料として活用しているが、評価コメントを記入し、返却するまでには多少の時間を要することから、一部十分なフィードバックが行われていないように感じた学生がいたかもしれない。

質問5.授業を受講し、この分野の学びを深めたいと思いましたか。

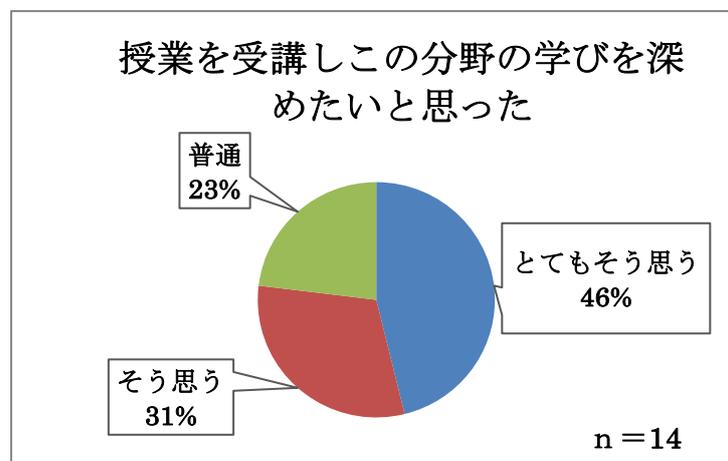


図8 授業を受講しこの分野の学びを深めたいと思った

本科目を履修した多くの学生が履修選択の理由として、現地での研修を体験できることや最終評価に筆記試験がなく、単位取得が比較的容易であるということにあることが想定される。しかし、図8のグラフから、8割に近い学生が学習内容に興味を持ち、また、授業内での様子やその都度の感想等を見る限り、関心を持って取り組んでいたことも実感された。

質問6.この授業に熱心に取り組みましたか。

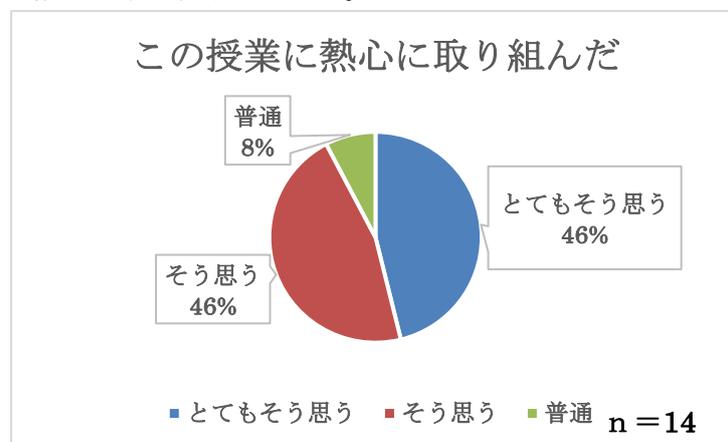


図9 この授業に熱心に取り組んだか

授業への取り組み姿勢について自己評価を求めた質問項目であるが、約半数の学生が高い評価を示している。また、「普通」と答えた学生は1名であり、全体的には熱心に取り組めたと評価している点は好ましい結果と考えたい。しかし、授業途中の報告書の作成やノートの記録などから、十分に時間をかけて丁寧に取り組んだ学生は一部であり、やや自己評価に甘さも見られる。

質問7.議論や発表を通して問題解決力が身に付きましたか。

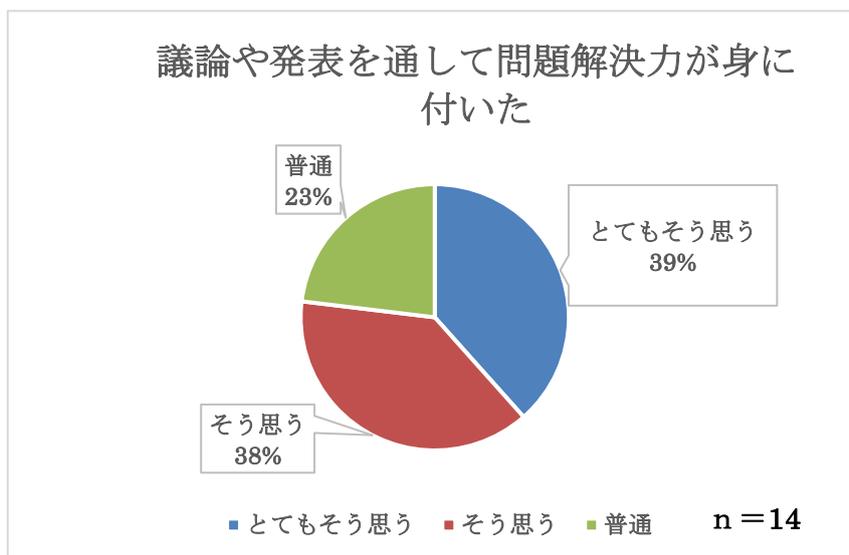


図10 議論や発表等を通して問題解決力が身に付いたか

本授業において特に議論の時間を設けたのは、班毎の現地研修における行動目標や研修コースの設定時である。また、研修後の発表資料作成の際、グループ内での話し合いがどの程度活発に行われたかによるが、上記のアンケート結果から見ても十分とは言えないことがわかる。授業内での様子を見ていても核となる学生を中心に事が進められており、議論を通して問題解決力が向上したとは言い難い。また、発表についても同様のことが考えられ、リーダーとなる学生が主体的に説明をしているようであった。

学んだことを知識として蓄えるだけの学修ではなく、常に問題意識を持ちながら新たな課題解決に向けて、協働しながら考え、判断し、表現していくことが強く求められているが、本科目に限らず、あらゆる学修場面で意図的、計画的にそのような場面を仕組んでいく必要がある。さらに、多様な学生が増えていく中であって、益々個の特性に応じながら支援をしていく学修スタイルが必要になってくると考えられる。今回の授業計画を立案するに当たっては、そのような視点からの準備がやや不足していたようにも感じられた。

質問8. 授業1回につき、どのくらいの時間外学習をしましたか。

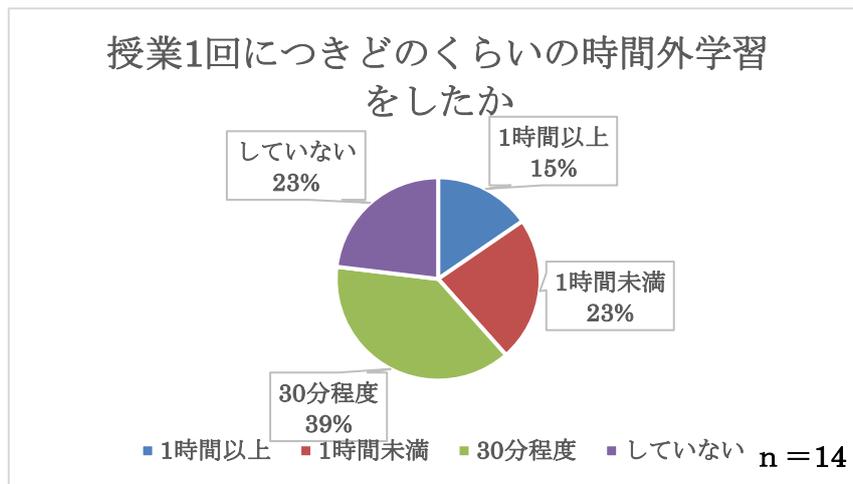


図11 授業1回につき、どのくらいの時間外学習をしたか

大学生の単位修得に係る学修時間は授業時間に加え、授業外における学修時間の十分な確保が必要であることは大学設置基準等にも示されている通りである。

本科目においては毎時間のノート記録の整理や現地研修の準備やまとめ、パソコンを活用した発表資料の作成等、授業外での個々の学生の主体的な学修を念頭に授業設計をしてきた。しかし、図11で示した授業外での学修時間を見ると予想以上に少なかったことがわかる。これは一部の学生にグループ内でのまとめ等の負担が偏ったことやノート記録の内容が薄く、学修の成果としては不十分な仕上がりであったことが理由として考えられる。

4. 学修成果(まとめ)

国際化の進展に伴って、「グローバル人材」育成の必要性が高等教育に強く求められており、多くの大学や短期大学において短期海外研修などが実施され、その成果が報告されている。このような中であって、工藤（2011）は『短期海外研修プログラムの教育的効果』と題し、海外研修の効果を、(1) 困難、(2) 緩衝行動、(3) 研修成果、(4) 新解釈の相互作用として捉え、研修の全体的効果を否定的側面も含め、動的な過程(プロセス)としてまとめている。つまり、研修の成果として一般的に報告されている、異文化理解やコミュニケーション力の向上などといったものは、はじめから存在するものではなく、現地での様々な困難さを伴った体験や、それを緩衝させるための行動と成果、さらにそれぞれが複雑に絡み合って生まれる新たな価値観や考え方が重要であるということになる。例えば、文化的に異なると思われる他者を人として受け入れるとか、他者からの批判や衝撃体験を通して新たな気付きや問題意識を持つようになるなどということである。

このような観点から、今回実施してきた本学での研修の成果を振り返ってみたい。

改めて、グループごとにまとめた感想や反省点等を拾い上げてみると、他者との協調性やコミュニケーションという点について、「学科を超えて（初めて）協力ができたことや、コミュニケーションがとれたこと」、「点呼時に遅刻し反省したが、集団行動における事前の確認や連絡の大切さを再認識したこと」、「実際の集団行動を通して、健学の精神を体験的に身に付けたこと」、「不安感やハプニングなどあったが、班員の中ですぐに連絡や報告を行ったことでチームワークの重要性を学んだこと」などである。また、異文化理解についても、班毎に計画した様々な文化施設や博物館などの訪問を通して、「横浜が海外の異文化交流を経てここまで栄えてきたこと」、

「異国の文化を学んだことで視野が広がり、理解力も深まったこと」などが挙げられる。

また、本学在学中の海外研修がきっかけとなって、海上自衛隊の料理係やキルギス共和国での青年海外協力隊・料理隊員として働いてきた卒業生とのオンラインでの講話からも、多くの学生が衝撃を受け、感動的な学びをしたことが窺える。「コミュニケーションは言語だけでなく、料理などの活動を共有することで生まれること」、「まず相手を認めることが人間関係を築く上で大切。今後の保育園実習に役立てたいこと」、「キルギス共和国に行って、自分も体験的に学びたいと思ったこと」など、間接的ではあるが聴講したことで実感的な学びをしたことが分かる。

授業アンケートからは、聴講した8割に近い学生が本科目の授業内容に興味・関心を示し、今後もこのような学修を深めたいと回答している。毎時間の授業に能動的な姿勢で取り組み、話し合いの中では積極的に自らの考えを述べたり、発表したりするなどの態度も多く見られるようになった。一人一人が授業の中での学修体験を通して成長したと言えるだろう。

5. おわりに

文部科学省は、国同士のよりよい関係を強化するために、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際社会に積極的に挑戦し貢献できる人材の育成を図るため、「教育再生実行会議」や「日本再興戦略 - Japan is Back-」等の事業を展開してきており、留学生の受け入れなども積極的に推進している。松井（2020）は『コロナの時代におけるグローバル人材育成 - 大学を中心に -』の中で、『コロナ時代に蓄えられた未知の世界への知的欲求やエネルギーは、ポストコロナを見据えたとき、グローバル化を加速し、持続可能な開発目標（SDGs）への関心も高まるだろう』と予測し、『大学等において、デジタル活用等により、グローバルに活躍できる人材が多数育成されていくことを期待している』と言う内容でまとめている。

本学においても、特にコロナ対応については今後の国や社会の動向を見極めながら、本学の健学の精神やSDGsの視点に基づいて、「海外研修」のねらいを達成するために、「今、できること」に積極的に取り組んでいきたい。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

参考文献

- ・大野誠（1995）「敦照の心」現代書林
- ・大野誠（2017）「Ever Advancing KOKUSAI AKUIN 創立 50 周年記念誌」埼玉新聞社
- ・工藤和宏（2011）ウェブマガジン「留学交流」2011年12月号 Vol.9
- ・松井一彦（2020）立法と調査 2020.11 No.429
- ・横濱おもてなし家（最終閲覧日 2022年8月31日）

<http://yokohama-jinrikisha.com/hamachizu/>

（執筆分担）

- ・ 2. 令和4年度「海外研修」当該授業の成果 3. 結果の分析 (1)調査対象及び時期 (2)調査執筆担当：大野琴絵
- ・ 1. はじめに、3. (4)授業アンケート結果からの分析、4. 学修成果（まとめ）、5. おわりに、参考文献 執筆担当：馬場和久
- ・ 3. (3) ノート提出結果の分析 執筆担当：大雅世